第11回サステナブルデザイン国際会議

Destination 2016

デスティネーション2016

The 11nd International Conference of Design for Sustainability

with **tennen design 2016**

photographed by JUNICHI KAIZUKA

テーマ

激変する環境・社会におけるサステナビリティ

地球環境の転換点と技術的特異点（シンギュラリティ）を越えて

Theme

Sustainability in the ecological and social upheaval

Beyond the turning point of global environment and technological singularity

■ 開催概要／ Outline

名称:　第11回サステナブルデザイン国際会議
Destination 2016 + tennen design 2016

会期:　2016年9月2日(金)～4日(日)

会場:　法然院 [9/2(金)～9/3(土)]
606-8422　京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町30番地
http://honen-in.jp/
あやべ吉水 [9/3(土)～9/4(日)]
623-1131　京都府綾部市睦寄町フケ10
http://yoshimizu.com/

言語:　日英ウイスパリング

参加者数:51名(内海外より1名)

主催:　サステナブルデザイン国際会議実行委員会

協賛:　アズビル株式会社

Name:　The 11th International Conference of Design for Sustainability "Destination 2016" + tennen design 2016

Term:　2nd - 4th, September 2016

Venue:　Honen-in Temple [2nd - 3rd]
Adress Kyoto
http://honen-in.jp/
Ayabe Yoshimizu [3rd - 4th]
Adress, Ayabe
http://yoshimizu.com/

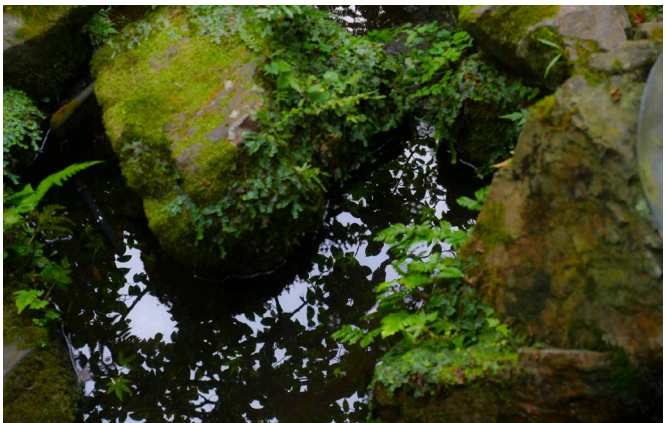
Language: whispering from Japanese to English

The number of participants :51

Organizer : The Executive Committee for International Conference of Design for Sustainability

Financial sponsor : Azbil Corporation

記念品として作成された一合升と手ぬぐい



■ プログラム／ Program

INDEX

《1日目》9月2日（金）11:00-20:00　法然院 ／《DAY1》2nd September, Fri at Honen-in Temple, Kyoto

11:00～	**開会の挨拶**　益田文和氏／サステナブルデザイン国際会議実行委員会 実行委員長	**Opening Remarks**　Fumikazu Masuda/ Founder and Chairman of The International Conference of Design for Sustainability	.... **P04**
	法然院について　梶田真章氏／法然院貫主	**About Honen-in Temple** Shinshou Kajita/Kanzu (Head Priest) of Honen-in Temple	.... **P04**
13:00-13:45	**問題提起1「所感」** 中川邦彦氏／東京造形大学名誉教授	**Raising a question 1 "Impression"** Kunihiko Nakagawa/Honorary professor of Tokyo Zokei University	.... **P06**
13:45-14:15	会場との意見交換　ファシリテーター:鈴木勝美氏／東京造形大学非常勤講師	Discussion - Facilitator: Katsumi Suzuki / Lecturer of Tokyo Zokei University	
14:30-15:15	**問題提起2「技術的特異点の向こうにあるもの」** 沖啓介氏／東京造形大学特任教授	**Raising a question 2 "Singularity, Collective Intelligence, and Sustainability"** Keisuke Oki / Specially-appointed professor of Tokyo Zokei University	.... **P07**
15:15-15:45	会場との意見交換　ファシリテーター:岩瀬大地氏 ／東京造形大学准教授	Discussion - Facilitator: Daichi Iwase / Associate professorof Tokyo Zokei University	
16:00-16:45	**問題提起3「サステナブルデザイン社会～豊かな生態系と豊かな人間性の増幅社会～」** 熊野英介氏／アミタホールディングス株式会社代表取締役会長兼社長	**Raising a question 3 "Sustainable Design Society, Amplifying the Society with Rich Ecosystem and Humanity"** Eisuke Kumano/President of Amita Holdings	.... **P08**
16:45-17:15	会場との意見交換　ファシリーテーター酒井良治氏／アールパートナー株式会社代表取締役	Discussion - Facilitator: Yoshiharu Sakai / R Partner Inc.	
17:30-18:15	**総括「1995年からの20年間をこれからにつなげる」**益田文和（サステナブルデザイン国際会議実行委員会 実行委員長）	**Conclusion "Connecting this 20-year period from 1995 to the future"** Fumikazu Masuda/ Founder and Chairman of The International Conference of Design for Sustainability	.... **P09**
18:15-18:45	会場との意見交換　ファシリテーター:本田圭吾氏／桑沢デザイン研究所専任教員	Discussion - Facilitator: Keigo Honda / Lecturer of Kuwasawa Design School	
19:00-20:00	ポットラックパーティー型自由討論	Potluck party and Free discussion	
20:00	終了	Close Day 1	

《2日目･午前》9月3日（土）9:00-11:30　法然院 ／《DAY2 AM》3rd September, Sat at Honen-in Temple, Kyoto

9:00-9:15	開会の挨拶	Opening Remarks	
9:15-10:00	**ご講話「共に生きる～絆と縁、愛と慈悲～」** 梶田真章氏／法然院貫主	ご講話「共に生きる～絆と縁、愛と慈悲～」 Shinshou Kajita/Kanzu (Head Priest) of Honen-in Temple	.... **P14**
10:00-11:00	質問	Q and A	
11:00-11:30	綾部について	About Ayabe	
11:30	閉会	Close	

《2日目･午後》9月3日（土）17:00-　あやべ吉水 ／《DAY2 PM》9月3日（土）17:00～　Yoshimisu, Ayabe

.... **P16**

17:00-18:00	散策、入浴、くつろぎ、食事の用意	Free time, Take a bath, Take a walk
18:00-19:00	夕食	Dinner
	ご挨拶　中川誼美氏／お宿吉水 代表	Greeting message Yoshimi Nakagawa / CEO, Yoshimizu inc.
19:00-20:00	自由時間、入浴	Free time / take a bath
20:00-23:00	**「これからのサステナブルデザイン」** ファシリーテーター:鈴木美絵氏／Amber代表	**"Sustainable Design, from now on"** Discussion - Facilitator: Mie Suzuki / Amber

《3日目》9月4日（日）あやべ吉水 /《DAY3》9月4日（日）Yoshimisu, Ayabe

朝食後　橡の木群生地など見学後解散	Breakfast, Small tour for a colony of elm

「開会の挨拶」

益田 文和／
サステナブルデザイン国際会議
実行委員長

皆様おはようございます。今日はこちらの法然院さんをお借りし、第11回目となる『サステナブルデザイン国際会議』と21年目の『天然デザイン』ということでお集まり頂きました。中には21年前の『天然デザイン'95』の際に参加して下さった方も何人もおられます。それ以降、私どもは、軌道修正も含め〝サステナブルデザイン〟という言い方をしながら、毎年1回10年、サステナブルデザイン国際会議を開催して参りました。こちらの会議にご参加下さった方もお出でかと思います。また今回初めてご参加頂いた方もいらっしゃると思います。本当にありがとうございます。

1995年、ご縁がありこの法然院で『天然デザイン』を開かせて頂きましたが、当時は環境庁にも後援を頂きたいと思い、お伺いしたところ、「環境庁というのは騒音や工場排水等のクレーム対策が主な役割で、地球規模の環境問題を取り扱う部署は日本の役所にはない」と言われ、大変驚きました。そういう時代でした。デザインを職能とする者として、環境問題に責任もある、関心を持たずにおれないと思い、そのことをご相談に伺いまして、梶田貫主と初めてお会いしたのですが、全て解っておられて、大変驚いたのを良く覚えています。日本の役所は何にも知らない時に梶田さんは全てをご存知で、法然院を快くお貸し頂きました。大変感謝しております。そして今回、21年ぶりに再びご相談に伺いましたところ、また快くお使い下さいと言って頂けました。

冒頭に梶田さんに法然院についてのお話を若干伺いたいと思います。そのお話の中から私がどうしてこういうところでこういう会議をやりたかったかということをお汲み取り頂ければ有難いと思います。

梶田さん、よろしくお願いいたします。

「法然院について」

梶田真章氏／法然院 貫主

21年前、私はまだ40才になっておりませんでした。お陰様でまだここを預かっておりましたので今回もお引き受けする事ができました。全て仏教ではご縁と申します。因縁の「縁」なのですが、ご縁があって皆様方をお迎えできました。今は「運」と言う方も多くなりましたが、ここに来られたのは縁なのか、運なのでしょうか。そういう事もお考え頂きつつ2日間お過ごし頂ければと思います。

法然院の歴史

法然院についてお話させて頂きます。法然という方が1133年、今の岡山県にお生まれになりました。地方豪族の坊ちゃんでした。お前は賢いから比叡山に行き勉強しなさいということで、当時比叡山延暦寺は現代で言うと京都大学でした。法然上人は10代半ばで比叡山に登られまして、比叡山天台宗の学問と修行をされたわけですが、どうも自分の器では修行しても結果がでないということで、私に相応しい仏への道は自力本願の修行ではなく、他力本願だとお思いになりました。

今でも比叡山や高野山で行なわれておりますように、自らの修行によって悟りを目指すというのが自力でございます。ところが法然上人はそれを試みたけれども自分はその器ではないということになり、出会ったのが他力本願念仏というものでした。

この他力と言うのは決して他人様の力という意味ではなく、人任せにして棚から牡丹餅的に幸せを掴もうというのではございません。仏の力という意味でございます。自分の力では仏になれないので、仏の力を信じ仏の国で仏にしてもらうしかないと、この世では悟られないから仏の国に行ってから悟らせてもらおうと、信じてこの世を生きようと、こう説かれたのが浄土宗の教えの、他力本願念仏です。

一言で言うと、自力は修行に生きるのですが、他力は信心に生きるわけでございます。自分の心は自分のままになるのかどうか、それが人類の永遠のテーマでございました。これについてお坊さんの意見は、仏教では真っ二つに分かれてきたというところが仏教の真に面白いところで、真に幅広いところでございます。

色々な宗派があり今日まで共存してきたのですが、簡単に言うと良い人、善人が極楽に行き、悪人は地獄に行きますよと言われていた時代に、それまでは阿弥陀様のところへ行くのも私が一生懸命修行したら極楽に行けると言われていた時代に、これだけ良い事をするので浄土に迎えて下さいと平安時代のお金持ちはせっせと仏像を作り、お寺を建て、沢山お経を奉納し、お布施をしていたのですけれど、法然上人が善人でも悪人でも南無阿弥陀仏さえ唱えたら極楽に行くとおっしゃったのでとんでもない教えだと、比叡山や奈良から猛反発を受けまして、法然上人に仏教を辞めさせねばならないということになりました。

そういう時に、この鹿ヶ谷（しかがたに）に庵を持ち住んでいた法然の弟子の安楽（あんらく）と寿連（じゅれん）が、後鳥羽上皇が可愛がっていた女官を出家させるという事件を起こしました。弟子が事件を起こし、師匠の責任が問われまして、法然上人は最終的には讃岐に流され、親鸞上人は越後に流され、安楽、寿連は死刑となりました。

この話は800年前の話ですが、江戸時代になり、この鹿ヶ谷に法然を顕彰するお寺を立てたいという、忍澂（にんちょう）という方が330年余り前に法然院を建てられました。非常に新しいお寺でございます。元々の庵はもっと山中にありました。この土地は今の法然院を作るために四代将軍徳川家綱から土地を頂きましたものとなります。

このように江戸時代まで、寺は元々は天皇家や大名等の大きなパトロンや、色々な方のご援助で維持されていたわけですが、明治になりますとそれは全く無くなりました。

普通の町や村のお寺には檀家さんがおり、法事により維持されていたので、明治以降も何の問題もなかったのですけれど、少し大きなお寺はパトロンがいなくなり、どうやって維持するかということになり、明治以降、少し大きなお寺は2つのタイプに分かれました。檀家を持ち先祖供養によって維持していこうというお寺と、檀家を持たず観光・拝観料で維持しようするお寺に別れました。また、もう1つあえて言えば加持祈祷のご利益信仰で維持して来たお寺もございます。このように寺は文字通り仏教によってではなく、他のことで残って来ました。現在7万以上の寺がございます。法然院も元々法然上人の教えを伝えるために建った寺ですが、やはり先祖供養によって残ってきました。

日本人の宗教は先祖教

日本人の宗教は仏教ではなく、実は先祖教です。こう名付けたのは柳田國男という民俗学者です。死んだら先祖になり家の守り神になるというのが日本人の伝統的宗教観念です。キリスト教のように特定の神様に救って頂くとか阿弥陀仏によって極楽に迎えて頂くとか、こういった宗教心は日本では人気がなく、色々な方のお陰で私の暮らしはあります、という考えで、これがご先祖様であったり村の氏神様であったりしました。お寺は沢山あっても仏教は少なかったということです。死んだら仏になるのではなく先祖になり家の守り神になるということでした。

※益田文和プロフィール→ P9

梶田 真章　Shinsyou Kajita

法然院貫主。京都府出身。父は法然院第30代貫主で神戸大学教授を務めた哲学者·橋本峰雄。大阪外国語大学ドイツ語学科卒業後、法然院執事となる。1984年に先代の往生に伴い、法然院の第31代の貫主となる。

法然院では、阿弥陀様の前の床の上に25輪の花を毎朝並べているという。阿弥陀様とともに25人の菩薩が我々を浄土へ導かれるというお経があり、25輪の花で25の菩薩を象徴するのが伝統となっている。

800 年前までは日本人は仏教徒だったので、色々な宗派に分かれ、自分に相応しい方法で悟りを目指そうと様々な宗派が共存してきた。しかし途中から私の家のお寺は浄土宗だとか言う話になり、家の宗教となりました。自分で選択しないのが日本人の宗教になり、長年続いて来ました。今の日本国憲法では信教の自由があるので家族のうちで宗教が違っていることもあります。その方が自然です。数十年前までは日本人は家の宗教で暮らして来たので、自分で選んだ宗教ではなく、何宗のお経でもいいので法事ができたら結構ですということでずっとやってきました。法然院も法然という看板を出していますが皆さんは法然が魅力的だったから来られたのではなく、この環境が好きなのでここに墓を建てたいということで来られた方がほとんどです。素晴らしい環境だということも含めて法然院を維持されて来たということだと思っております。

「法然院·森の教室のはじまり」

元々法然の教えを伝えるべく出発した法然院は、段々と法事をすることによって維持する形になりましたが、私の父、先代の住職がこのお寺を預かったのは 1976 年頃ですが、最近の情勢に応じ、皆さんにとって法然院はどういった意味を持っていけばいいのかということを考えられ、先代は、お寺は開かれた共同体でなくてはいけないと考えました。檀家のためだけの閉ざされた共同体ではなく、他の方にとっても意味のあるお寺でなくてはならないということを考えられました。仏教は日本では葬式仏教と言われて久しいですが、葬式を含め、人間が本当の意味で生き死にできる場、それが、先代が掲げた目標でした。しかし先代は 59 才で往生してしまったので、8 年しかここを預かりませんでした。私は 27 才でここを預かる事となりました。皆さんがここを素晴らしい環境だと言って下さる理由を考えた時に、日本にはこういった環境が減っているのではないかと気付き、この環境を生かし何かできないかと考え、身近な環境に接して皆様がこれからの環境はいかにあるべきか考えて頂きたいということで、近所の同じような関心のある方と住職になった翌年、85 年に始めたのが「法然院 · 森の教室」という活動でした。

この看板を出すと、京都新聞に載り、別の形でも使わせて頂きたいというお申し出が出るようになりました。その頃、丁度バブルの時期で大文字山のゴルフ場建設や、鴨川上流のダム建設への反対運動などが京都の山裾のあらちこちらで起こり、そういった活動をなさっている方からお話を頂き、森の教室とは別にそういったことを考える会を開くようになり、お付き合いも増えていきました。様々な方とのご縁から、落語会や、美術展、学会やシンポジウム等、色々な形の催しが広がっていたところに、益田様との出会いがありました。95 年、森の教室を始めてから 10 年程経った頃でした。先程色々褒めて頂きましたが、私はそういう関心は 10 年間ほど続けていたので、益田様のおっしゃたこともだいたい理解させて頂いた状況だったわけです。

開かれた共同体としてのお寺

そういうように何某かの場を儲けて、人の思いを集めて、ご縁を広げていくというのが私なりにお寺の役割ではないかと思っております。ですので、そういった継続してきた活動から様々な方の想いが集まって、繋がっているということは、誠に有難いお話です。今回のお話も 21 年経ち、また思い出して下さったことは誠に有難いことです。ご縁があったのだと思っております。

人間はどんどん新しいことを企画して喜んだり、同じ事に安心したりする生き物です。皆様方もお仕事では来年は今年と違うことをということが大切なのでしょうが、あえてお寺は去年と同じことが起こっているということに安心して頂く場でもあろうと思っています。お寺は来て頂くところではなく、ただいまと帰って来て頂くところだと思っています。戻って頂く場としてお寺は意味があるのだと思っています。

お寺は人と仏様が最終的に出会う場所ですが、いきなり仏様と出会って頂くのは現代日本人にはハードルが高いと思います。ということで、一緒にこの地球の歴史を生きて来た回りの色々な生き物と向き合って頂き、色々な方と出会って頂き、ここに集まって頂くことで、そして最終的にはなぜお寺は建てられたのか、何を伝えたいところなのかに関心を持って頂き、仏様と出会って頂くことがあれば有難いと思いつつ、84 年から 32 年余りこちらを預からせて頂いて参りました。

様々に人に恵まれ、環境に恵まれ、法然院を中心に色々な方と出会って頂き新しいことが広がっていければ有難いと思って活動させてもらっております。坊主としては寺は開かれた共同体として、皆様と共に色んな価値観の違う方同士が、どのように世界を平和にしていくのかを考える大変大切な場所の1つだと思っています。まだまだ十分ではございません。微力でございます。でもけして無力ではない、微力はあると信じて私なりに活動していきたいなと思うところでございます。

"About Honen-in"

Shinshou Kajita
Kanzu (Head Priest) of Honen-in Temple, Kyoto

Honen-in was built in 1680 by the priest Nincho. Honen is the name of the priest who founded the Jodo-shu or Pure Land Sect of Buddhism and lived from 1133 to 1212. He made a thatched hut for Buddhist training, but after he passed away, that place fell into ruin. About 400 years later, priest Bambu decided to build a temple at the site to remind people of Honen. Bambu commended his pupil Nincho to complete Honen-in. That's how this temple came to be built. In 1953, the temple became independent of the Jodo-shu sect. Honen-in itself was the venue of 1995 Tennen Design Conference, which was the firstly held conference of Tennen or natural design in this same venue. Back then, Tennen Design was meant for designers to understand more about design philosophy that everything in nature was created for a purpose. This 11th International Conference of Design for Sustainability 2016 with Tennen Design will be the last event and we hold it at the same place to also mark the memorial of 1995 Tennen Design Conference.

「所 感」

中川 邦彦／東京造形大学名誉教授

中川邦彦　Kunihiko Nakagawa

東京造形大学名誉教授。映画物語研究·サステナブルプロジェクツ研究。

種の多様性

持続社会の対象は生物の種の持続です。ただしこの考えは日本史上で悪用されたことがあります。戦争で家族の未来、あるいは天皇制度·日本国家の永続の為に、若い男性の命を捧げさせられたという非常に悪い事例があります。そこで種や個人の持続の悪用を防ぐためには、「種の多様性の持続がなければ種は持続しない」という考えが必要です。この考えにたてば他の多様な人間がなくなる事は許されないという思想が得られます。

1995年にtennen design会議が開かれる前の5年間を振り返ると、一つは「全体化」と「分離」です。欧州連合発足を中心にグローバリゼーションを作るきっかけになるものができました。一方1991年にはかつて「連邦」をつくっていたソヴィエト連邦が崩壊しました。その次に、「個」(le singulier)の尊重も芽生えています。そしてその特異点(la singularité)、様々な特異的なものが尊重されることが起きています。それが破壊されることも起きています。例えば1991年にWHOが同性愛を病気の一覧から削除しました。今では考えられませんが同性愛は当時病気でした。環境問題では1992年「環境と開発に関する国際連合会議」がリオデジャネイロで開催されました。そこで生物多様性、生物圏が語られ、生態系、絶滅危惧種への関心が高まりました。同時に環境的衰退や文化の衰退を引き起こすとして、先住民にいかなる危害も加えないということも成されています。そのような背景の中で第1回tennen design会議が行なわれました。

それから20年

テロリズムが問題化しています。戦争で無くなったイラクが再建する過程で様々なテロ事件が起こり、IS·ISILという過激な宗教団体の支配が起きています。そしてこの内戦状態へ世界の軍隊が介入しています。国連軍が作動しない中でアメリカ·イギリス主導の一種の戦争行為が宣戦布告なしに行われることが一般化し、今ではテロリズムを計画するものは殺しても良い、つまり法治国家として対処せずに戦争の延長上でただ殺せばよいという考えがこの20年間で一般化しています。このようなテロリズムへの抵抗運動が行われていくと、国は16歳以上の外国人の指紋採取及び顔写真の撮影を義務付け、個人の肖像権·人格権が侵される法律がまかり通るようになってしまいます。テロリズムを利用した対策となっていくわけです。

全体化·共= commonの喪失

共通な財産「common」の喪失も起きています。中央都市が空洞化して地方に人がいなくなっていき、生活圏が年々失われ、大都会·中都会に人が集中していきます。その過程で元々の生活圏であった小さな単位の村等が失われていきます。そしてcommonであったはずの広場や生活道具が失われています。アントニオ·ネグリ(Negri Antonio)とマイケル·ハート(Hardt Michel)著の『叛逆』という本では、アイデアやイメージ、行動、情報のようなcommon、地球の生態システム、森林や海洋や土、空気、水、などのcommonをどうやって育て、実現していくかについて述べています。私達は代理制民主主義または多数決制にすっかり騙されていますが、それによって行われるのは少数が無視され、尊重されないことです。特異性を育てていくにはそれぞれの特異性を守るためにお互いに協力していかなければなりません。代理制ではなく直接的な民主主義で互いの声を聞き、問題を理解し、直接皆がアイデアを出し、それに納得していくことが大切だと述べています。

また、文明崩壊の兆しが顕著になりました。大水害、地震等の天災だけでなく、内戦や原子力発電所事故、グローバル工業化、グローバル金融資本等の人災によってより広範囲で生活環境の破壊がなされ、難民·国内難民が大量に生みだされています。その中で個や特異性はどう扱われたのでしょうか。1997年に東電OL殺人事件があり、被害者のプライバシーを暴く報道合戦が問題になりました。何か事件が起こると商業ジャーナリズムがその被害者の問題や加害者の人権を脅かし、それを商業的に明らかにしていくのです。皆がまとまると、それから外れた人間をからかい、手をだし、最後にはその人達を自殺に追いやる事が盛んにこの20年間で行われています。

1995年のtennen design会議

tennen design会議では時間を経て「同化」する事について話しました。それは言いかえれば「愛着」です。次々と出てくる新しいもの、便利なものに対し「愛着」という用語で違う考え方を出そうとしました。その他に「シンプルな情報」「生を保証する最小律(負のデザイン)」「循環システム」「精進料理」「竹」「ふろしき」「音」「グリーンマップ」についても話しました。デザインとは産業の中でデザインをするのではなく、むしろ依頼主なしのデザイン、ボランティアのデザインを考えていき、それらが社会デザインに関係していくものだと思います。

Raising a question 1

"Impression"

Kunihiko Nakagawa / Honorary professor of Tokyo Zokei University

Theme: The 1st Tennen Design Conference 1995 and 20 years after

Summary: He was one of the witness of 1995's Tennen Design Conference in Kyoto. Five years prior to, there were things like unification and segregation all around the world. The major exploitation of environment was also starting to become a major issue.

The First Tennen Design Conference was about discussing the key issues upon this condition. Starting from the assimilation, simple design (tennen design), minimum principle to guarantee lives (design for minus), circulation system, vegetarian diet, furoshiki, green maps and volunteer designs. 20 years after The First Tennen Design Conference, the loss of common is increasing. People are destroying environment through exploitation in development. This can be seen through the nuclear power and the increase of refugees.

The main point of Mr. Nakagawa lecture is upon the responsibility of the future generation. The upcoming generations should be better in common. Common here means as shared property, where people gather and be more open to each other. Thus by applying the common to the life itself, it is hoped that the future can be shared and prepared better for a longer and more prosperous life.

問題提起2

「技術的特異点のむこうにあるもの」

沖 啓介／東京造形大学特任教授

技術発展による社会変化とサステナビリティ

技術的特異点とは2045年頃に訪れると言われている技術の大きな変化のことです。これまで歴史上、石器時代、青銅時代、鉄の時代があり、水力、蒸気エンジン、そして産業革命が起こりました。その後電気、自動車技術、一番最近がITです。この変化が進んでいきます。現在コンピューターの能力が非常に高くなっており、2040年あたりで人間の脳の処理能力に匹敵すると予想されています。生物工学の技術開発も進み、それにともない医療技術も大きく変わると考えられます。この変化によりどのようなことが起こるのでしょうか。高性能な機械の開発が進む中で人間の価値がどうなるのか考えなくてはなりません。これまでのように人口や寿命が増え続けていくのかどうか考えなくてはなりません。高齢化社会の問題も直前に来ています。

現在、国連がSDGsという、17の目標を掲げています。1·貧困をなくそう、2·饑餓をゼロに、3·全ての人に健康と福祉を、4·質の高い教育を皆に、5·ジェンダー平等を実現しよう、6·安全な水とトイレを皆に、7·エネルギーを皆にそしてクリーンに、8·働きがいも経済成長も、9·産業と技術革新の基盤をつくろう、10·人や国の不平等を無くそう、11·住み続けられるまちづくりを、12·つくる責任つかう責任、13·気候変動に具体的な対策を、14·海の豊かさを守ろう、15·陸の豊かさも守ろう、16·平和と公正を全ての人に、17·パートナーシップで目標を達成しよう、というものです。このように国連が出す課題はかなり明確になりました。我々が今後サステナビリティについて考える上ではこの辺りをそれぞれの分野で進化させ、様々な専門科や人々が集まり話を進めていく事が必要です。

集合知、コモンズ、オープンデータ、シェアリングエコノミーから作る社会

蜂や蟻等社会性のある動物は個々では大した能力を持っていませんが、集団になると優れた能力を発揮します。この集団で発揮される知性のことを集合知と言います。例えば2012年の福島の原発事故の際、東京で電気使用量が継続的に発表され、電気消費量が分かるようになっていました。それを見て人々が自主的に省エネを意識したことで停電が起きなかった。このように正しいデータがあれば人々は集合知を発揮することができます。

今、行政や産業等社会の様々なデータを公開していくオープンガバメントという活動があります。データによって正しい判断が可能な世の中を作っていく活動です。他にも例えば病気に関するデータをオープンにすれば、様々な知見が集まり新たな治療法が見つかるのではないか等、新しいデータで新しい技術を作り出すことが考えられています。

このようなオープンデータはある意味コモンズです。コモンズとは入会地という意味で、日本で言えば里山のような誰の所有でもない誰もが使える場所のことで、空気や太陽もそうです。現代では音楽やアート、科学の実験成果もコモンズです。このように集合知、コモンズ、オープンデータが関わってきています。

もう1つ新しい方法として考えられているのがシェアリングエコノミーです。様々な物やサービスをシェアする経済です。例えば民泊やカーシェアリング等にも見られます。ジェレミー·リフキン著「限界費用0の社会」によると、シェアリング経済とコモンズによって新しい社会のあり方が生まれてくるそうです。限界費用とは経済学用語で、ある生産の段階から1単位あげる時にかかる費用のことです。今ソーラーエネルギーが進んでいます。すると太陽光の発電設備も進みます。自動車も電気自動車に変わってきています。すると例えばガレージにソーラーバッテリーが付き、エネルギーコストをかけずに自動車が充電できるようになります。このような形で生産量をあげるための様々なものがゼロに近くなる社会が考えられています。

沖 啓介　Keisuke Oki

東京造形大学特任教授。多摩美術大学の学生の頃から、コンピュータ、シンセサイザーなどのテクノロジーを使ったアートやデザインを開始し、大学卒業後にデザイナーとして働き、その後ニューヨークに移住。90年代にインターネットが登場して広がりつつある時期にカーネギーメロン大学の研究員となる。現在は、美術系と工学系の大学でデジタル·デザイン、ソーシャル·デザイン、サステナビリティについて教えている。

これからのデザインのあり方

エツィオ·マンズィニ著『Design, When Everybody Designs』によると、かつてのデザインは閉鎖的なものでした。デザイナーと施主が作り、評価もその中で済んでいました。しかし今では高い情報へのアクセスが可能なため、そこだけで成り立つ事は無くなりつつあります。周囲のものも含めてデザインする状態になっています。今は利用者と共同でデザインする形が必要になってきています。これからはデザインの専門家はデザインのあり方を組織したり、やりとりの場を設定するようなことをしていくべきだ、と書いています。

シンギー·カルトノさんはインドネシアの村で竹の自転車を作っています。彼曰く竹の自転車はマグネットであり、それによって他の色々なものが集まってくるそうです。デザインの専門家としてきれいな竹の自転車を作っていますが、それとともに共同でデザインする場を作っていくことを考えています。彼のデザイナーとしての実践が、マンズィニさんの言う誰もがデザインする時のデザインに繋がっています。サステナブルデザイン国際会議として、デザインの1つのあり方をこのようなところで見る事ができると考えられます。

Raising a question 2

"Singularity, Collective Intelligence, and Sustainability"

Keisuke Oki / Specially-appointed professor of Tokyo Zokei University

There was a hypothesis upon the 2045 condition where the ability of computer overtakes that of human brain. The United Nations organization has concluded the Sustainable Development Goals (SDGs) that are supposed to be supported by all people around the world for a better future, which are consisted of 17 points such as: 1. No Poverty, 2. Zero Hunger, 3. Good Health and Well-Being, 4. Quality Education, 5. Gender Equality, 6. Clean Water and Sanitation, 7. Affordable and Clean Energy, 8. Decent Work and Economic Growth, 9. Industry, Innovation and Infrastructure, 10. Reduced Inequality, 11. Sustainable Cities and Communities, 12. Responsible Consumption and Production, 13. Climate Action, 14. Life Below Water, 15. Life on Land, 16. Peace Justice and Strong Intuitions, 17. Partnerships for the Goals.

The SDGs can also be seen from another way of 5 Ps which are: People, Prosperity, Peace, Partnership and Planet. As he agrees with these goals, he added information upon DESIS Lab Network, which is a network of Design for Social Innovation and Sustainability. This network consists of labs, schools, and people who believe in open data and support sustainability through social innovations. The aim is to protect the common. The sample of common act itself can be seen in Japan's Open Government Lab which develops civic technology through information technology (IT). In the future, there are three points that will become the drivers of Sharing Economy, they are Economy, Social, and Technology. The starting of common activities can be seen from the co-designing and co-working era. This era leads into a diffuse design where people do more interaction to each other and being less organized.

「サステナブルデザイン社会～豊かな生態系と豊かな人間性の増幅社会～」

熊野 英介／アミタホールディングス株式会社代表取締役会長兼社長

哲学が生まれ、そこから科学が生まれ、産業が生まれ、社会が発達するというメカニズムが止まっています。環境権と平和的生存権は誰かが被害を受けないと裁判所に持って行って権利を示すことはできません。「法律のもとに平等」だと言えなくなってきています。つまり「人間の尊厳」から「生命の尊厳」という価値観に基づく哲学が生まれるかどうかなのです。AIは確かにすごいですが、それは生命の尊厳を守れる技術なのでしょうか。このような問いに対する価値観を構築しないと何も始まりません。

劣化する工業社会と新しい哲学の必要性

サステナブルとはエネルギーや食料の持続性だけでなく、人間を含む生態系が持続的に繁栄する生存域の構築だと思っています。

近代文明は産業革命以降、工業的な社会をつくりました。実は農業も林業も工業化しています。林業が栄えて森林が疲弊し、農業が栄えて里山が劣化しています。工業社会では生活を担保しているのが工業企業なので市長が誰になっても生活は変わりません。我々の生活に政治は関係がなくなってしまいました。

それでも実体経済が動いている時は政治も影響力がありますが、今は貨幣経済の時代です。金融経済はすでに実体経済の約9倍です。グローバル金融資本は誰にもコントロールできません。工業や金融が劣化する中、もはや産業を国家にゆだねる時代ではないと思います。

同時に私達は人類史上初めての事を経験しています。衣食住足りて不幸になっています。豊かになればなるほど、環境破壊、アレルギー、引きこもり、ストレス、自殺、孤独死などが増えています。長寿を手に入れ、情報社会から電脳社会に移ろうとしています。ところが、このように人類史上初めての事態を迎えているのに、哲学が20世紀のままです。

未来へのヒントは江戸時代にある

「成長の限界」という本を書いたノルウェーの学者のヨルゲン･ランダースは、産業が上昇するほど資源は減り、水が枯渇するので農業も減るとした上で、これらに伴い人口も減少すると述べています。また、「2052」という著書の中では、「2052年までオーバーシュートの心配はない」としています。つまり、ランダースは科学者として、2052年でオーバーシュートする、「社会は元に戻れない」という指摘をしているのです。

このような局面を迎え、人間が食い詰めた時、私達はどういう未来を構築するのでしょうか。強いものが残る帝国主義か、管理されて生きのびる管理社会でしょうか。私は第3の社会を作りたいのです。そこには「少量消費の最大幸福」という近代と真逆の価値観があります。この社会の実現については江戸時代にヒントがあります。江戸時代は鎖国していても、経済は発展していました。1人あたりのGDPが17%増えているのです。この間何が生まれたのでしょうか。元禄時代には10種類程度しか無かった椿類が、幕末には100種類を越えていたそうです。お上が派手なものを辞めなさいと言った時には着物の色として四十八茶百ネズミを作りました。100種類以上ものネズミ色を作ったのです。これによって流通交換が生まれます。そしてこれらは原価計算も大量生産もしていません。このような知恵が未来に役立ちます。金融も工業も劣化していきますが、自然資本と人間関係資本だけは丁寧に扱えば増える資本なのです。

次ぎなる新しい産業マインダストリー

ロビン･ダンバーという文化人類学者が狩猟採集グループを調べたところ、グループの規模は約150人がいいとされており、脳科学でも最適な数字だと言われています。11世紀のイギリスの戸籍を150人程度です。つまり産業革命以前は150人規模の集団生活が、社会保障を含め一番生産性の高い生き方だったのです。しかし産業革命以降そのフレームが壊れていったのだと思います。これを修復するには新しいマニファクチュアの時代を迎える必要があります。これからは「人生を送るため、暮らすために何が必要か」という必需品をつくる時代です。それについて、マインドとインダストリーという言葉をかけてマインダストリーという言葉を造語しました。次なる文明のイメージは情報や知恵をインターネット含めて狩猟採集し、それを自分で統合し、周りのコミュニティの心を掴むデザインでマインダストリーする文明です。そのコミュニティは有形性的なものだけではありません。無形のNGOや趣味、会社等の共同体もコミュニティです。そしてこの共同体の交差点が新しい想像の種になります。人間関係が増幅する無形のカンパニーです。

この小さなカンパニーの集まりが、地産地消のインプット、アウトプットを考えながら競争します。自立した自治的な、交差する無形有形の共同体を常につくり続けて市場の駆動力にしていくのです。政治ではなく購買行動で社会が変化していきます。マインダストリー的な経済活動をする中産階級から、森を守らなくては私のところは暮らしていけない、弱い人を守らないと私のところは困る、というような民主主義が発生する仕組みです。新しい心の産業革命をぜひこの国から始めたいと思っています。

Raising a question 3

"Sustainable Design Society ~Amplifying the Society with Rich Ecosystem and Humanity"

Eisuke Kumano/President of Amita Holdings

Amita sees Japan as an advanced nation with social problems and believes that the future needs a sustainable society. It is believed that creative society and bureaucracy are mutually exclusive. This is because creative society is mostly created out of freedom and openness, which are in reverse from the nature of bureaucracy. The tangibles and the intangibles collaborative is important, and he called as mindustry. Mindustry works to harmonize competing individuals aim. Mindustry's target is to remove hierarchy in the market system today. This target is hoped to support the creative society needs to grow in the future.

Free society which is made by the democracy of people with middle class economic activities, which not only focusing on money making, but rather on the value of fulfillment itself. This free society coexists with the mindustry. Mindustry is an industry that supports this vulnerable future, and Amita is trying to be one of it. The majority of mindustry exists in the area which needs to be fulfilled. Amita believes that sustainability means to construct a living environment to be able to keep progress both in ecological system and in human nature.

熊野 英介　Eisuke Kumano

1956年兵庫県生まれ。アミタホールディングス株式会社代表取締役会長兼社長。公益財団法人信頼資本財団理事長。一般社団法人ソーシャルビジネス･ネットワーク副代表理事。

「持続可能社会の実現」を掲げ、他社に先駆け再資源化事業を開始。その後、ソリューション事業や地域支援事業を手がけ、環境分野を牽引。未来の子供達の尊厳を守ることをミッションに掲げ、豊かな関係性が動力となる新たな社会の創出に向けて邁進中。

著書に『思考するカンパニー』（幻冬舎）がある。
www.amita-hd.co.jp

「1995 年からの 20 年間をこれからにつなげる」

益田 文和／サステナブルデザイン国際会議実行委員長

山本良一先生からのメッセージ

皆さんにお配りしている資料をご覧ください。『地球のような惑星は宇宙的に見て稀であるという仮説とエシカル消費』という東京大学名誉教授の山本良一先生からの文章です。（▶01）山本先生は、1995年の天然デザインには出ておられないのですが、そのすぐ後にご一緒する機会があり、それ以来ずっと環境とデザインの活動を一緒にさせて頂いています。

95年、天然デザインの頃、我々は「エコデザイン」という言い方をしていたのですが、それを聞いて面白いねということであっという間に工学畑の概念になりました。エコデザインは技術者がやってきたことになっていますが、元々デザインの考え方です。その後ずっとエコデザインの活動を続けていたのですが、2006年頃に「山本先生、エコデザインでは問題は解決できないから、サステナブルデザインにしましょう。」ということで、サステナブルデザイン国際会議を始めました。そうこうしている内に山本先生は、最近はどこで見つけて来たのか「エシカル消費」という言葉を盛んに使われるようになりました。中身についてはこれをお読みください。今日はおいで頂けるはずだったのですが、体調などの関係でおいでになることができず、代わりにこの文章を送ってくださいました。この長い文章を一言で言ってしまうのは乱暴ですが、あえて一言で言えば、地球がご神体であるということをおっしゃられています。宇宙に生命は、地球以外に存在しないと考えた方がいい、であればこの地球こそがご神体である、という達観です。それが山本先生の宇宙観であり、世界観であり、宗教観であると言う事だと思います。それをエシカルという言葉を使って言っておられます。地球とその地球で暮らす全ての生命体のことを考えて物を作り、使う。そしてそれ事以外は認めないようにしよう、という非常に厳しい考え方ですけども、今度のオリンピックもエシカルオリンピックだと政府に強く言っておられるとのことです。

1980年代
ビクター・パパネックが警笛を鳴らしたデザイナーと環境の問題

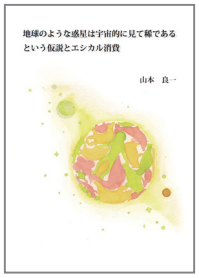
私がデザインをしながら地球の環境を考え始めたのは1980年代です。それよりも前、私が学生の頃、すでに何冊もそういったことを述べている本がで出ていました。その中でもとても影響を受けたのがヴィクター・パパネックの『生き延びるためのデザイン』という本です（▶02）。原初が出たのは1971年だと思いますが、1974年に邦訳版が出てすぐにそれを読みました。研究生でした。序文に真っ先に書いてあったのは、「世の中で如何わしい商売は色々あるけど、その最たるものはインダストリアルデザインだ」と書いてあったんですね。それよりもひどい商売がもしあるとすれば役にも立たないものを売ろうとする広告を作っているようなグラフィックデザイナーだと。愕然としまして、教授にその本を持って飛んでいき、こんなことが書いてあります、と見せました。当時の私の尊敬する教授は「そういう悪い本は読むな」と言われまして、なおさら興味深く読みました。そこにはこの先の起こることが全てが書かれていました。そして、このままではデザイナーはとんでもないことをすることになるぞ、という警告が書いてありました。

では、どうしたらいいかということもその本には書いてありました。それは何年か前に注目された、BOPデザインのことでした。世界の最貧困層にとって何か本当に役立つ、命を長らえていく最低の情報を収拾し、そのための道具を作るべきだ、ということが書かれていました。それを知っていながら、いざプロとして仕事を始めると、言っていることとやっていることが裏腹になっていく。常におかしいと思っていても、そういった現実がありました。

環境を考えるデザイナー集団
O2（オートゥー）

1980年後半、ある風変わりなデンマーク人のデザイナーがいました。ニールス・ピーター・フリントという男です。彼はイタリアでエットレ・ソットサスの事務所に勤めていたのですが、思い立って事務所を飛び出しました。イタリアからデンマークへと向かう道すがら、彼は信頼できるデザイナーの友人達に声をかけ、『O2』というネットワークを作りました。7カ国から国を代表するデザイナーの友人を1人ずつ。地球環境を考えるデザイナー集団です。

ニールスと私が出会ったのは1989年です。彼はたまたま来日していました。ガリガリに痩せていて、長く伸びた金髪を束ね、もう10月で寒いのに穴が空いたTシャツを着ている、そういう男でした。話を聞いて、僕らが考えている事と非常によく似たことを悩ん



01

02

▶01『地球のような惑星は宇宙的に見て稀であるという仮説とエシカル消費』東京大学名誉教授の山本良一先生から本会議に寄せられた文章。

▶02『生きのびるためのデザイン』著 ヴィクター・パパネック、訳 阿部 公正（晶文社／1974）

益田 文和　Fumikazu Masuda

1949 年東京生まれ。東京造形大卒業後、建設会社、デザインオフィスを経て 1978 年よりフリー。その後 frogdesign デザインディレクターを務め、1991 年株式会社オープンハウス設立。製品デザイン開発や地域産業のデザイン振興、また、エコデザインやサステナブルデザインに関する国内外のプロジェクトに関わる。東京造形大学デザイン学科教授、有限責任事業組合エコデザイン研究所代表、o2 Japan リエゾン、財団法人日本産業デザイン振興会理事、一般社団法人日本デザインコンサルタント協会理事を歴任。執筆等多数。
株式会社オープンハウス 代表取締役。
www.openhouse.co.jp

でいて、じゃあ一緒にやろう、ということでそれ以来、デンマークやオランダを中心にヨーロッパのデザイナー達とやりとりをするようになりました。

1993年
ロッテルダム　O2イベント

1993年、ニールスを中心に、O2はオランダのロッテルダムで環境とデザインを考える、大きなイベントを開催しました。使われなくなった広大な港湾施設を借り切り、お金はかけてないのですが素晴らしい演出でした。かつてロッテルダムはヨーロッパからの移民が夢を持ってアメリカへ発つ港でした。その結果がこれだというその出発点に戻って考えようということで、ロッテルダムでイベントを開いたのです。400名も参加した大きな会議でした。（▶03）

このイベントで、先程の本の著者、ヴィクター･パパネック（▶04）も、もうご高齢でいらっしゃったのですが、大変長い、素晴らしいプレゼンテーションをしてくれました。80枚のスライドが入ったリールを3つも用意して、コダックのカルーセルで次から次へとスライドを見せながら話をしてくれたのですが、私が驚いたのはスライドの半分くらいが日本の写真なんです。日本のありとあらゆる自然、建築、畳や茶筅や、そういうものを引き合いに出しながら彼が考える本当の意味での正しいデザインとは何かを説かれました。当時、ヨーロッパでは盛んに日本に対する環境バッシングがありました。日本は全てをスクラップ･アンド･ビルドする。家も木で作って古くなったら取り壊す。伊勢神宮も20年毎に全部作り直すし、神聖な建物でさえスクラップ･アンド･ビルドする。そんな国は他にない、とんでもない、ということが言われていたんですね。

しかし、パパネックはプレゼンテーションの中で伊勢神宮の航空写真を映し出し、式年遷宮のシステムについて正しく紹介して下さいました。伊勢神宮の背後には広大な森があり、そこに育つ檜を20年に一度注意深く切り出し、社殿を作っては新たに植林する。檜が20年かけて育つ間、社殿もまた自然に朽ち果て、建て直す。これが繰り返されて、1000年でも2000年でも続いていく。「ご覧、これがサステナビリティということだ。」とヨーロッパ人に言ってくれたんですね。パパネックは非常に過激なデザイン評論家で実践者で厳しい人ですから、常に辛口なんですけれど、彼がそういうことを言ってくれて、大変驚きました。

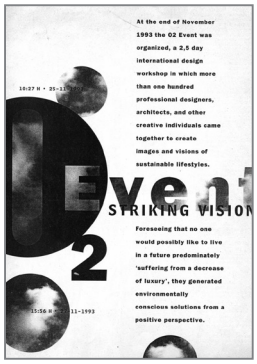
日本からはほぼ参加者がいなく、発表者では私が唯一の日本人でした。なので、後ろの方の席に遠慮して座っていたのですが、パパネックのプレゼンテーションが終わるとニールスが振り返って、私に「じゃあ次は日本でやろう!」と言ったのですね。すると会場400人全員が私の方を振り返って見るという状況となり、NOとは言えないから「分かったよ」と言って日本に帰って来たのですが、さあどうしたものか。2年の準備期間で1995年に何かをしなくてはいけない、ということになりました。

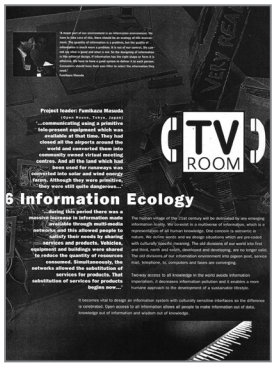
1995年
京都　天然デザイン'95

最初は東京でやるつもりで、東京でやるよと言ったらニールスが東京じゃ駄目だ、京都だって言うんですね。私は京都には全く縁もゆかりもなかったので困り果てていたのですが、唯一の京都の知り合いだった右衛門佐（よもさ）さんに相談したら、法然院さんがいいとおっしゃられました。それで始めて法然院さんにお伺いし、梶田さんにお会いしました。何しろ私が驚いたのは、何度もこのお話をしていますが、お坊さんにデザインの話をするなんてどういう風にお話していいのか分からないのですね。インダストリアルデザインなんて分かって頂けないだろう、ましてや地球レベルの環境の話なんて漠然とした話をどう切り出したらいいのかと悩みながら、少しずつ話始めたんです。そうしたら梶田さんは途中まで聞かれて、ニコニコ笑いながら「IDとエコを一緒に考えるのはなかなか難しいことでしょう」とおっしゃったんですね。インダストリアルデザインのことをIDとおっしゃるのです。環境と私が言っていたのも汲み取って「エコ」とおっしゃる。どこのお坊さまかと、大変驚きましたが、使っていいですよと言って頂けまして、1995年に『天然デザイン』をやりました。21年前です。沢山の方が集まって下さって、ずいぶん賑やかな会とすることができました。（▶05）

1996年〜1997年
環境配慮型設計からエコデザインへ

その翌年1996年に山本良一さんとお会いしました。先程も言ったように、環境庁に環境問題の話をしても全然相手にされかったような時代です。その頃、環境に配慮したデザインに関するプロモーションをするという大きなミッションで、先ほど沖先生のお話にも登場していました、エツィオ･マンズィニ教授が来日し、色々な企業に行ったのですが、彼がすごく怒っているのですね。どこの企業に行っても、大企業であろうと環境について何も配慮していない言う、そんなはずはな

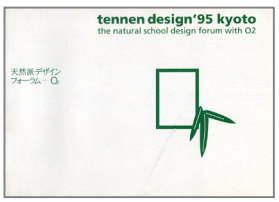


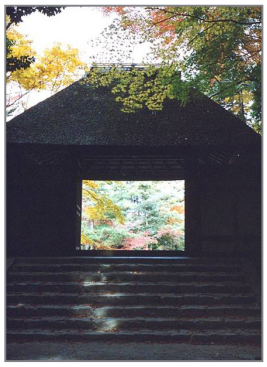


▶03 1993年にロッテルダムで開催されたO2イベントのリーフレット

Global Network 2

▶04 O2イベントの記念撮影。ヴィクター･パパネック氏の姿も。





▶05 1995年開催の「天然デザイン'95」。当時も今回の会場である法然院さんをお借りし行った。

いと。彼らは全くの秘密主義だと。しかし、その頃、日本の企業は本当に何もしていなかった。そういう状況だったのです。

けれども、山本先生が随分熱心に政治家に週1で講義をなさって、だんだんそういう気運ができてきたのでしょう。その経緯を私は知らないのですが、ようやく政府や企業や大学が動き始めます。当時は「エコデザイン」ではなく「環境配慮型設計」と言い方をしていました。それで、とりあえず他の先進国の様子を見てこようということで、政府、大学、企業の関係者が視察に向かいました。その報告会に私も呼ばれ参加、端っこに座っていたのですが、視察団長さんがとても不思議な事が見えて来た、と言って話されたのが、ヨーロッパでは「エコデザイン」という言葉を使っていて、オランダではデルフト工科大学のインダストリアルデザインということをやっている大学院生達がこのようななマニュアルをまとめていると言って、分厚い本を紹介しました。インダストリアルデザインとは何だ？ と皆が首をひねっていたので、私がご説明したりしました。1997年です。

1999年
「エコプロダクツ展」はじまる

そして1999年、「エコデザイン」はいきなりブレイクします。ブレイクといったのは、要するにお金が出たということです。経済産業省が1億円を投げ出して東京ビッグサイトを借り切り、「エコプロダクツ展」というのを初めたんですね（▶06）。実行委員長は山本先生です。今でも続いていますし、大変大きくなっています。大企業も手探り状態で、色々なものを出展していて、中にはどうしてそれが環境に配慮しているのか疑問を持つような物もありました。そういう色々なものが出展されていたのですが、妙なものも出てくる。これではちょっとまずい、誰がどういう基準で出展するものを選んだらいいんでしょうか、という話が実行委員会で出たんですね。そうすると、山本先生は、たぶん苦し紛れだったとも思うのですが、ギリシャ神話を例にして、ギリシャ神話にはギリシャ12神というのがいるが、それに入らないそれ以外の神もいると。要するに、色々な物が出てくるけど、それ以外のものも出してしまえばいい。来場者が疑問に思うようなものは淘汰されていくだろうと、そういうすごく良い加減な判断をされたのですね。

エコデザインのジレンマ

それが数年続くうちに、本当に段々変な事になってきました。まるでモーターショーと変わらない。コンパニオンが沢山いて景品を配るような事になってきました。さらには、エコプロダクツ展の学生アルバイトが、撤収後に僕のところに飛んでくるのですね。どういう事ですか？ と写真を撮って見せにくる。そこにはすごい廃棄物の山が写っている。要するに大きなブースを作ってエコ製品の宣伝をし、その後は廃棄物の山になり、それを焼却処分している。何がエコなんですか？ と学生達も言う。さすがに見るに見かねて、山本先生に言ったんですね。みっともなくて見てられません、何がエコなんですか、どうするんですかと。すると、言い終わるのを待たずに切り返されました。「これやってるのは皆デザイナーだろう」と。二の句がつげない。

これではまずいと思いました。いくら技術の話をしても、それが商品価値になり売れるという文脈がある限り、それは決して我々が望んでいるような結論は生まれないだろうということをすごく感じたのです。

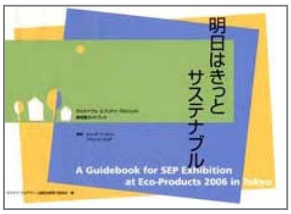
サステナブルデザイン国際会議 開始

それで、2006年にサステナブルデザイン国際会議を始めることにしました。（▶07）第1回目を開催するにあたり、我々はいつを睨んでこの議論をしていくかを考え、20年後に設定しようと思いました。それで山本先生に20年後の2026年をターゲットイヤーにします、と言いました。そうしたら、「来年はどうするのか？」というので、来年は2027年がターゲットイヤーですよと言うと、「それではいつまでたっても到達しない、目標は固定しなきゃ駄目だ」と言われました。その通りなのですけど、ちょっと悔しいので、では毎年目標を手前に近づけ、ターゲットイヤーと実際の年が丁度重なる2016年に目標を実現する、ということで設定しました。Destination 20XX-20XXというのは、そういった意味です。

2006年
第1回サステナブルデザイン国際会議
Destination 2006-2026

第1回目はビッグサイトのエコプロダクツ展の会場の上のホールでやりました。1階では技術を売る、何を売る、とやっているわけですけど、それじゃあ何もならないよ、というその批判をその上でやる、そういう戦略でした。技術者やデザイナーや色々な人が建物を上下しながら両方に参加してくれました。この人達分かっているのかな？ と思いながらもやりました。最初は何をサステナブルデザインというのかという定義をつけなければならない、という

▶06 エコプロダクツ展の会場となっている東京ビッグサイト（上）。2016年度は700以上の社・団体が出展、来場者数は160,000人を超える大きな展示会となっている。



▶07 第1回目のサステナブルデザイン国際会議では、講演会の他、エツィオ・マンズィニ氏とフランソワ・ジェグ氏による、サステナブルな暮らし方をワークショップ形式で探る研究、「サステナブル・エブリデイ・プロジェクト」の展示会を同時開催。日本語版カタログも作成。

▶08 第2回の会議は、白川郷で開催。2泊3日の合宿形式で行われ、昼夜を通してサステナブルな社会とはどんなものか、そのビジョンについて語り合った。

ことで、世界中から様々な領域の方をお呼びしてご意見を伺う、というような内容でした。エツィオ·マンズィニも講演してくれました。

2007年
第2回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2007-2025

翌年は、3日間、雪の白川郷で合宿形式で行いました。初めて雪を見るインドネシア人のシンギー·カルトノもプレゼンテーションをしてくれたりしました。この3日間は本当に密度のある内容でした。大企業の社長さんから学生までが同じテーブルで真剣に議論しました。その議論の成果を2025年の日本のあるべき姿、サステナブルな社会の姿として、絵巻物にしました（▶08）。これを山本先生に託し、山本先生はそれを、その直後にあった洞爺湖サミットで、これを台本にサミットを仕切って下さいね、ということで総理大臣にお渡ししました。しばらく内閣府のホームページに掲載されていたのですが、あっという間に総理大臣が変わってしまって、今はどうなっているのか知りません。

2008年
第3回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2008-2024

第3回は東京の港区エコプラザで開催しました。前回の絵巻を作る作業で、私も考える作業に結構くたびれ、考えるばかりでなく、行動するべきだ、ということで、デザインのことが分かるアクティビストをお呼びしようということになり、当時のグリーンピース·ジャパンの代表の星川淳さんをお招きしました。星川さんは九州芸術工科大学（現·九州大学）でデザインを学び、環境関連の書籍を訳されたり、ご自分でも執筆されたりしていた方なのですが、そういう方が国際環境NGOの代表になった。何が動機でどういう風にアクティビストに変身できるんだろう、ということを聞こうということでお呼びしたのですね。この回では、「サステナブルデザイン行動宣言」というものを作成し、参加者皆がサインをしました。（▶09）以後、皆がバーンとアクティビストになって、行動して行き、世の中が変わる! と思ったんですけど、そうはならなりませんでした。

2009年
第4回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2009-2023

第4回は、実行委員会でミーティングをしているうちに、面白い事をしている若者が結構出てきている、と、実行委員が情報を集めて来てくれたので、その人達を呼んで渋谷の桑沢デザイン研究所と六本木のデザインハブで沢山の若い方にお話をして頂きました。ベンチャービジネスで、しかも環境、サステナビリティに絡むような面白い事業の実例を次から次へと発表してもらいました。ペチャクチャナイトというやり方も試しました。非常に面白かったです。その中には今でも続いているのがありますし、あっという間に無くなってしまったものもありますけども、いずれにしましても、色々な芽があることが分かり、少し希望を持ち始めました。（▶10）

2010年
第5回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2010-2022

第5回目は東北芸術工科大学さんから共催のお申し出を頂きました。前年、東京での様々な新しい動きを見て、だったら地方にもいるに違い、地方に目を向けることで見えてくるものがあるはずだ、ということで、山形県で開催しました。沢山の方が参加してくださり、実りのある大きな会議となりました。（▶011）

この時に、もう一度エツィオ·マンズィニに来てもらい講演をしてもらったのですが、彼は、まだ僕らが知らない、新しい重要な概念を教えてくれました。それは「SLOC（スロック）」というキーワードでした。Sはsmall、小さくあれ。Lはloca、地方分散であれ。Oはopen、開かれたものであれ、最後のCはconnected、繋がり、ネットワーキング。それらの頭文字をとった言葉で、小さくて、分散している、開かれた組織が繋がっていくこと。これがサステナブルな社会や経済を考えていく時のキーワードだということを彼は教えてくれたのです。これは、恐竜が滅んで行く時に、小さなほ乳類が小さな集団となって走り回って危険を回避し、沢山の子供を生んで生き残った、そういうモデルなんだと教えてくれました。

大企業は滅んで行く恐竜のようなものであり、ましてや原子力発電所のようなものが1番危ないと。一度何かあったら取り返しのつかないことになるような大変大きなリスクを背負いながら巨大な物を動かしているということほどサステナブルでない状況はない、と言う事を彼は言ってくれた。

そして、彼が帰国した2週間後、東日本大震災が起きました。彼はすぐに電話をしてきました。何かまずいことを言ったのではないか、と言うのですね。別にあなたが言ったから起

▶09 第3回会議では、「サステナブルデザイン行動宣言」を作成し、皆で署名をした。

▶11 山形で開催された第5回の会議。

▶10 第4回の会議。若い世代が沢山集まった会議だった。

▶12 第5回会議。日本だけではどうにもならないということで、アジアのサステナビリティに目を向けた。

きた訳ではないんだから、しょうがないよ、と言ったのですが、でもそれはある種、想定内の事だったということの1つのエビデンスだと思います。我々もすっかり価値観だとか立ち位置だとか色々な物の見方だとか考え方が変わりました。

2011年
第6回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2011-2021

それ以来、将来に対するあまりにも楽観的な考え方、まだ時間があるという緩さをなくし、もっと早く動かなくてはいけない、ということで、少ない人数で緊急に集まり、第6回目の会議を開きました。その時の1つの結論は、日本だけでサステナブルを語ることはできない、ということです。こんな小さな島国で、食料自給率ですら40%を切り、鉱物は0%、エネルギーは4%の自給率。4%というのは水力発電で、もちろん石油は全然出ません。生活を他国に頼りきっているそんな国で、サステナブルとか言っているのはどうなんだろう、我々だけではだめだ、周りの人達と共に考えるべきである、という結論になりました。（▶12）

2012年
第7回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2012-2020

翌年、第7回目はタイのバンコクを中心に開催しました。ランシット大学の皆様、岩瀬さんが随分協力をして下さいました。タイ、インドネシア、カンボジア、香港、そして日本から、異なる文化背景を持つ参加者同士の密度ある議論は大変意義深いものがありました。また、座学だけでなく、初めての試みとして「トラベリング・ワークショップ」ということも行いました。伝統的な暮らしを続けている少数民族の集落を訪れ、文化継承の在り方を学びましたが、一方で、少子高齢化、都市への若者の流出、モータリゼーションや廃棄物の増加といった急速な都市化に伴うアジア共通の課題についても、考える機会となりました。（▶13）

2013年
第8回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2013-2019

翌年、今度は北九州市から共催のお話を頂きました。北九州では水素でエネルギーを賄う壮大な実証実験を始めるということで、都市のひとつのサステナブルな在り方として、それを語りたい、ということでした。我々はそれはちょっとおかしいと思いました。水素で都市が動く、その水素は製鉄の過程で生まれるもので、製鉄がないとエネルギーが無い。それは本当にサステナブルなのでしょうか、と反論したのですが、都市の1つの在り方としてはそれもあるはずだ、ということで共催することといたしました。けれども、それにあたっては、対局として「農村」もテーマに組み込み、山口県の楠クリーン村や、岡山県の美しい村、新庄村も視察しました。結論から言うと、非常に抽象的なサステナブルな概念は説得力がない、というのが実感です。山口、岡山の方が遥かにリアリティがありました。（▶14）

2014年
第9回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2014-2018

第9回は、第2回、第7回の会議でスピーチをしてくれた、インドネシアのシンギー・カルトノが、The International Conference on Village Revitalization（ICVR／村おこし国際会議）というものを設立するので、インドネシアで共同開催したい、という話があり、インドネシアで開催しました。そこで盛大な歓迎を受けて、中央ジャワの小さな村、カンダンガン村というところで開催しました。豊かな自然の中を竹で作った自転車で走ったり、エネルギッシュで大変素晴らしい会議となりました。（▶15）

2015年
第10回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2015-2017

第10回目は私達も活動の拠点を東京から山口に移しておりましたので、インドネシアの皆を山口へ呼び、YCAM（山口情報芸術センター）の協力を得て開催しました。（▶16）

2016年　最終回
第11回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2016

それで今回は11回目、最終回です。もう一度原点に戻ろうということでこちらにへ戻って参りました。これまでの20年間は、皆さんが今日まで語って下さったことの通りです。

特に、今回開催にあたり、貫主さんとお話した際に、「若気の至りでしたね」とおっしゃられたことが印象的です。そして、我々はそういうことを3000年やってても、人間なんてよくなりません。3000年やっても何もよくならならないけども、それでも願い続け、祈り続け、言い続けているんです、とおっしゃっられました。今回で我々は、ひとつの区切りが付きますが、この後、一体どうしていったらいいのか、ということを皆さんとお話したいと思います。

▶13 第7回の会議はタイで開催。バンコクだけでなく都市を離れ、国境近くの寺院で瞑想も体験。

▶14 第8回の会議は北九州市で開催。

▶15 第9回の会議はインドネシアの農村で開催。インドネシアの観光大臣も足を運んでくださり、大きな会議となった。

▶16 第10回の会議は山口県のYCAMで開催。

「共に生きる～絆と縁、愛と慈悲」

梶田 真章 氏／法然院貫主

四苦から抜け出す

改めて仏教についてお話したいと思います。仏教はお釈迦様の説かれた苦しみからの解放をどうやって達成するのかということでございます。苦しみとは四苦八苦の「四苦」。生老病死です。老いたくないのに老いなくてはいけません。病になりたくないのに病になる事もあります。死にたくないのに死ぬ事もあります。その原因はどこにあるのかというと、生まれてくる事である。お釈迦様はこのように考えられたのです。生老病死の生は生きる事ではなくて生まれてくる事です。生まれては死ぬ、生まれては死ぬ、と繰り返すのが私どもの在り方です。生まれて来た以上、老病死は必然でなんの不思議もない事です。老いたくないと思わなければ、老いる事は苦でなくなります。老いたくないと思うから、老いが苦になるのです。老病死を避けるには生まれないようにするしかありません。どうやって生まれないようにするのか、どうやって「六道輪廻」から抜け出し、解脱するのでしょうか。これらを説かれたのがお釈迦様でございました。

では、四苦の原因はどこにあるのでしょうか。お釈迦様は、自己愛にあると考えられました。自己を愛するから自分の人生を思い通りにしようとするのであり、自己愛こそが苦の種なのですと。だから本当に苦しみから逃れたければ、愛する事を辞めるしかありません。愛する事とはつまり、煩悩を膨らませることです。煩悩を押さえることが仏への道、目覚めへの道だと説かれたのでございます。

全ては縁により

お釈迦様が説かれた真理に、「縁起」という事がございます。縁起とは「因縁生起」です。全ては因縁によって生まれ起こるということです。因縁とは原因と条件でございます。オリンピック等をご覧になると解かりますように、いくら原因を作っても、その日の条件次第で結果は変わります。努力が結果に現れるかどうかはその日のご縁に左右されるということです。単純な因果でこの世は説明できません。最後は縁によってどうにでもなります。それがこの世であると説いて参りました。縁はどこからどう巡ってくるか分からない、努力したから叶うと思っているとその執着自体が苦となる、と言っているのが仏教です。

全ては移ろいゆく存在

仏教では、全てはその時々の因縁により、どうなるかわからない其々の存在と捉えます。「諸行無常」という考え方です。全てはその時の因縁により絶えず変わり続けています。人間も紅葉や桜と同じように諸行無常です。そのことをちゃんと自分の中に受け止め生きようというのが仏教です。別の言い方をすれば「諸法無我」です。存在には実態がありません。そのときの因縁として移ろい行くのが全ての存在の在り方だということです。そして煩悩を断った悟りの世界は、心静まった安らぎの境地であり、これを「涅槃寂静」と言ってきました。まとめて言えば「一切皆苦」です。一切の現象的存在は全てままならない、思い通りにならないのが人生・世界である、ということです。ですから、思い通りにいっているということは本当に有難いことだと受け止めて来たのが、元々の日本人の自己や世界の在り方の受け止め方だったと思います。物事に対し、本当に有難いことだと思う感覚は、大変大事だと思います。なぜ私はこんなに努力しているのに結果がでないのか、縁があるか無いかだからでございます。ですから焦らないで時期を待つということが大事になりますが、すぐに結果を求め、待つ事が難しくなっているのも現代です。「待つとはなしに待つ」、なかなかこれができなくなっているのが今の日本かもしれないと思います。

慈悲に生きるということ

悟りへの道は自力本願と他力本願の 2 つに分かれ説かれてきました。六道輪廻の中で何度も生まれては死ぬを繰り返しながら修行し仏になるのが自力本願です。修行を永遠に繰り返しても私は目覚める事ができないので、六道輪廻から抜け出し、浄土に往生する、仏様に迎えてもらう、これが他力本願でございます。

善人と悪人がいると普通は考えますが、善人も悪人もないという見方も一方ではあります。夏目漱石の小説『こころ』の中でも善人が急に悪人に変わり、だから恐ろしいと言っております。仏教では、人は縁によって善人にも悪人にもなると考えてきました。一生善人もいないし、一生悪人もいません。私から見て善人なのか悪人なのかということがあるだけの事、今のところあの人を悪人だと思うのは、今のところ私が悪い事をしていないだけで、縁が整えば私も何をするか分からないと、このように考えてきました。

そう考えない人もいます。修行をすれば自分の意思の力で善悪をコントロールしていけると思うお坊さんもいます。

私どもは法然・親鸞の教えに基づき、善人になるか悪人になるかはその時の縁次第であり、自分自体のことも生涯不可解であるというのが私どもの人間観です。そういったことを受け止めつつ、「南無阿弥陀仏」と唱えて生きるしかない、最終的にそのようなことから自由になれるのは死んでからの事と信じて生きます。これが私どもの他力本願念仏です。

本日のお話のテーマにもありますが、仏教で大事なのは、愛ではなく「慈悲」に生きるということです。そして、どう実践すればそれが叶っていくのかという事です。キリスト教では、神様の心を愛と訳し、日本では愛という言葉が希望的な言葉として広がっている訳ですが、仏教では愛は執着に繋がります。仏教では自己本位の心を愛といいい、慈悲と分けて説いてきました。全ての対象を慈しみ悲しむのが仏様の心で、慈悲と申します。仏様は被害者のためにも悲しまれるが、加害者のためにも悲しまれます。一切衆生のために悲しまれるのが仏様と信じてきた訳です。私どもは愛で生きているのでどちらかに加担し、どちらかには同情するけれどもどちらかには同情しません。それが私どもの愛です。しかし、そうではなく、一切衆生を目覚めさせたい、成仏させたいというのが仏様の願い、悲願であると説いて来たのが、特に阿弥陀仏を信じる、他力本願の仏教の歴史です。人の心はその時の縁によってどうなるか分からないのだから、支え合ってやっていくしかないと考えたのが慈悲を説く仏教の在りようと思います。

でも一般的には、そう思えないという方も多いですから別メニューも仏教にはあります。自分の心は自分で磨けるはずだと信じ生きるのもひとつの人生の意味です。でもそうしたからと言って最終的に本当に他者に対し寛容になれたかということが問われるのが仏教の修行であり信心です。どの方法、どの宗派が正しいかではなく、自分がどう信じ、どう実践したら仏様の心に少しでも近づけたかと考えるのが仏教で、私は愚か者だ、悪人だ、どうし

ようもない人間だと思えば、どうしようもない人でも、それでも同じ仲間だと思い支え合って生きていけませんか、と説いたのが法然と親鸞です。大阪的に言うと、私はちゃんとアホやと認めて生きよ、と言う事です。私は仏さんから見ればほんまにアホやなと思えば、人がアホなことしていても私と同じやな、と思っていけないか、ということです。怒っても仕方が無いから一緒に笑い飛ばし、この世にちょっとゆとりを持って生きていこうじゃないかというのが法然上人が文化となった上方漫才的見方でございます。

自分の心を磨くほうが人生の意味だという方には不思議な教えですから、そういう方は修行をして頂いて、仲間を増やして頂いて、共に成仏していこうと信じて生きることが肝要かと思います。

大切なことは自分に厳しく道徳を求めると、人にも道徳を求める傾向が強くありますから、そうなると私こそが正しい、あなたは間違っている、と、かえって諍(いさか)いとなることもございます。一番素晴らしいのはお釈迦様のように自分に厳しく人に寛容になり、文字通り仏様になることです。どうやって宗教心を持ちつつ寛容になっていけるのかということが、全ての人間にとって問われていくところです。

仏教は色々なメニューを皆様に提供してきた宗教です。昔から色々な考えで色々な信心と修行によって、でも最後は一緒に成仏しましょうよと目指す寛容さが大事かと思います。

自然は生物同士が支え合うシステム

2つめの意味で使うと、自然と人間の共生という言い方ができますが、私はできれば1つめの意味で自然を捉えたいという人間です。鴨川で釣りしている人も、道を歩いている人も鴨川の自然の一部なのだと考えたい私としては、現代までよく言われてきた「自然と人間の共生」、「自然との共生」という言い方にずっと疑問を受けていました。皆様にとって自然とはどういう意味でございましょうか。六道輪廻を信じる坊主としては、私は昔は椿だったかもしれないし、あの椿も人間だったかもしれない、そう思いつつ向き合わせてもらっていますので、鴨川の自然と言った時も当然人間も他の生き物と並んで自然の一部だと思いたい。と、世界を見ていました。

私にとって自然とは、生き物同士が支え合う仕組みのことだと思います。自然が豊かだということは人間もそこにいて、他の生き物もいて一緒に支えつつ、あるいは傷つけ合いつつ共にこの世界を形成しているということです。その仕組みこそが自然であると私なりに理解しつつ、一切衆生と共に生きていきたいと思います。共に生きるということは、共に支え合うということであり、共に傷つけあうということでもあります。ここをしっかりと見据え一緒に生きるとはどういうことなのか考えていく視点が大事なのではないかと思っています。

絆と縁、人生の意味、愛と慈悲

最後になりますが、「絆」という言葉。この言葉は5年半前から特に東北地方でよく使われる言葉となりました。絆は元々、馬や犬等の動物を繋ぎ止める綱のことでした。人は繋がっていないと不安ですから、誰かと繋がっていたいと思うものです。絆は大事だなと思うのも人間です。でもあったらあったでロープがきつ過ぎて、緩めてほしいとも思ったり、かえって重さに感じる、ということもあります。

これこそが愛と関わってきます。愛こそが生きていく喜びでありつつ、愛こそが時に苦しみを生む種になります。絆こそが生きていく拠り所であり、しかし時に苦を与えることもあります。これをよくよく受け止め、愛や絆に生きようとしつつ、時には特定の方だけではなく、今日出会った方とのご縁を大事に、できることをできる相手に実践する、生きていく喜びにするというのが縁を大事に慈悲を実践する生き方だと思います。一つの人間の生きていく意味になると思っています。

人間は自分の人生にともかく意味づけしたい生き物です。意味づけするからこそ生きていく拠り所ができてきますが、逆に意味づけするから時に苦しむのも人間です。通常の意味付けでは足りなかったり、それが動かなくなった時、もうひとつ大きな物語、意味づけを持って一緒に生きていきましょうと言っていきたのが宗教の存在理由だと思います。十分に普通の意味づけで済んでる人には宗教は不要です。普通の意味づけが自分を苦しめている時にはもう少し大きな物語で自分の人生を意味づけて一緒に生きていこうというのが宗教の存在理由だと私なりに思います。

仏教は一切衆生の成仏という悲願を育み合って、慈悲の実践という活動に生きていきましょうと伝えて参りました。二千数百年、悲願を広げようとし広げきれていないのが仏教です。遅遅たる歩みです。きっとサステナブルデザインも、まだ生まれたばかりです。これからその意思を広げていかれるのは大変な道だと思います。これこそがその方にとっての悲願となるかもしれないと思いつつ、それぞれの生きていく意味、何を大事にしていくか、改めて問うて頂くような一時になっていれば私は有難く思うところです。意を尽くせませんが終わります。ありがとうございました。

A Sermon

Living Together:
Bond and Fate, Love and Mercy

Shinshou Kajita
Kanzu (Head Priest) of Honen-in Temple, Kyoto

Japanese holds various religious minds, such as Shinto, Buddhism, Christianity, Irreligion, and the last is worshipping of the ancestor which is the basic belief of Japanese people up until the first half of Muromachi era (1333-1573). Japanese people believed that praying to Buddha is for something in the next world, while praying to Kami/God is for something in the present life. There are three definitions of God (Kami) in Japan:

•God is believed to be anything, such as rock, water, mountain, and anything in nature.
•God as the endless circle of transmigration, such as karma among people in India.
•God is believed as a relief after death, in order not to be fallen to the hell.

There lived a folklorist in 1875-1962, namely Kunio Yanagita. He is known as the father of Japanese native folkloristic (minzokugaku). He had four remarks about souls, which departed souls never leaves their homeland, the present life and the life after death coexist in the same time, every last wish will be realized in the life after death world and that everyone is able to continue a same occupation in the life after death.

There are lots of Buddhism temple in Japan, they hold three basic roles which are firstly as a memorial service, secondly as a benefit which gained in this world, and lastly as a sightseeing business. Buddhism believes that there will come a time of relief from The Four Sufferings, which are consisted of birth, old age, disease, and death. The Buddhist people also believes that the only permanent thing in life is the impermanence itself. Thus, who you are is who you are today, as tomorrow you will be a different person from who you are today. Buddhism believes that process is more important, although assessment of the result sometimes makes us too. He explains that there are two ways to achieve enlightenment (satori) in Buddhism:

•Jiriki which believes that enlightenment is achieved through self effort, it is a belief that holds strict effort and discipline.
•Tariki which believes that enlightenment is achieved only through worship.

In Japan, Nature (shizen) is defined based on the cognitive objects. The Nature can be everything it the world, including human.

In the past, the present and the future, earth had always been and will always meant to be lived together by all its inhabitants. Therefore the belief of living together is as a practice of mercy.

「これからのサステナブルデザイン」あやべ吉水で語りたかったこと

2006 年にサステナブルデザイン国際会議を始めた時、期限を切るということを真っ先に考えた。1993 年ロッテルダムでの O2 Event、1995 年の天然デザイン。あの頃、世界は数年で、少なくとも 10 年もすれば変わると信じていた。あるいはそうあるべきだと考えていた。しかし、それから 10 年経って、エコだ、環境だ、省エネだと誰もが口にするようになったけれど、事態は悪化の一途をたどっているではないか。こんなことをいつまで続けていても仕方ない。期限を切って決着をつけよう。というわけでサステナブルな社会を実現する期限を勝手に設けた。あと 20 年。だから第一回のサステナブルデザイン国際会議のシンボルマークは 2006-2026。20 年後の世界を見据えて今何をなすべきか？ ところがこれを見た山本良一教授は、「20 年後、20 年後と言ってるうちに世界はダメになるよ」。あ、でも案内はもう刷ってしまった。それならカウントダウンしよう、というわけで第 2 回の 2007 年の目標年は 2025。第 3 回は 2024。こうしておけば計算上、最後は 2016 年で目標達成。そうして今回晴れて最終回を迎えたのである。

さて、世界は変わったか？ 変わりましたね。世界中の科学者がこぞって警鐘を鳴らして死守すべきと訴えていた＋ 2℃の温暖化防衛ラインは既に放棄され、退却を余儀なくされている。気候変動の証は世界中に現れているのに、エネルギー消費も資源消費も減る気配すらない。

ただ、良い変化も見てとれる。一つは世界がこのままでは立ち行かなくなるということ、つまり un-sustainable であるということを、世界中の子供ですら気付いているということ。もう一つは、グローバル経済に退潮の兆しが見えるということ。だからといって自動的に軌道修正がなされるだろうと考えるのは安易にすぎる。自動的に流れるはずの自然のシステムに逆らってシステム自体を壊してきたのが人間だから、何をしでかすか分かったものではない。どちらに動くにせよ、変化が生まれつつあること自体に期待するしかないのだ。それでも流れに変化が見えるのならば、ここぞとばかりに棹さして流れの先の景色を見てみたい。電線やガス管や水道管や電波で繋がれていない暮しをしてみたらどうなるのか、経済成長を止めてみたらどうなるのか？ サステナブルって本気でやったらどうなっちゃうんだ？

きっと不便だろう。きっと不幸だろう。そう思っていたら誰もそんなことに興味は持たないから勧めてみたところで無駄だろう。やってみて、悪くはないよ、結構いける、いや、なかなかいいよ、と言えるようにならない限り説得力は持ちえない。そういう考えを強く持つきっかけになったのは 2011 年の東日本大震災である。エネルギー自給率たったの数パーセント、鉱物資源ほぼゼロパーセント、食糧ですら 40 パーセント未満というこの国が GDP 第 2 位まで上り詰めた無理のしわ寄せが原発事故で露呈した。電気が消えた銀座を歩きながらたまらなく悔しくてやけに悲しくてそのくせばかみたいに清々しい、何とも妙な気分に浸ったものだった。

東京を離れ、山口に見つけた空き地にオフグリッドの小屋を建てて越してみると、取り立てて便利でないことは不便ではなく、取り立てて幸せでないことは不幸とは違うということが良く分る。なんとか食ってゆける暮らしぶりが続けられればありがたいのであって、その状態をサステナブルというらしい。そのことを皆で確認して 10 年続いたサステナブルデザイン国際会議の最終回 2016-2016 を締めくくりたいと思って京都のあやべ吉水をお借りした。ここも、オーナーの中川誼美さんが東京銀座の旅館をたたんで移ってきたところ。20 年ぶりの天然デザインを法然院で済ませたその足で綾部までやってきて、たどり着いたのがちょっと前の日本の暮らしを謳う古民家だったから、居心地がいい。みんな良く食べて良く飲んでわいわいやっているうちに夜が明けてしまった。いつ幕が下りたのやら、次の幕が上がったのやら判然としないのだけれど、まあ、なんとなく、なんとなくではあるけれど天然デザインからサステナブルデザインへとつないできた 20 年間の先にあるのはそう悪い未来ではないような気がするのである。

それは、私が 40 代から 60 代へと 20 年分歳をとったからかもしれないが、日本という国もまた年を経て、150 年間世界を相手に競い、争ってきた揚句に見えてきたものがあるのではないか。日本だけでなく世界の人々が今というこの時を同時体験できるようになって、初めて気付いたことがあるはずだ。誰かが多く獲得すれば誰かがその分失うことになるのだ。多くを求め、得られてもまだ満たされぬ気持ちを満たそうとするのが欲望ならば、これ以上欲しくない、もうしたくないというのもまた強い欲求としてある。そのバランスの中で皆がなんとかかんとか食っていける暮らしが得られればそれで良しとする、そんな粋な世の中にしてみたいものである。

益田文和

「あやべ吉水」は京都北部の山里にある古い茅葺き屋根の宿。かまどで炊いたご飯と地域の食材。囲炉裏を囲む、素朴で自然と共にある暮らし。少し前まであった前にあった日本の暮らしがここにはある。

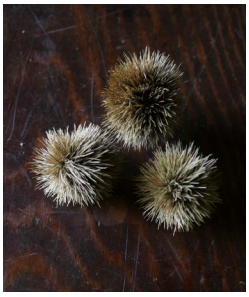
Despite of the distinct backgrounds and various themes of their talks, explicitly all those five speakers share one conclusion in common: the common itself.

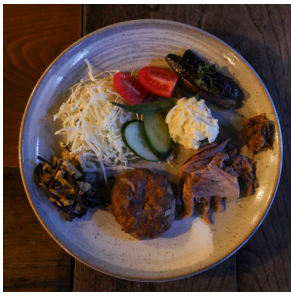
They all believe in that the sustainable future lays in the hand of common. Common is undeniably can be described as a moment where everything starts local, being open, and connected globally. On the last day of the conference, an open discussion runs warm, deep down inside a traditional Japanese house in Yoshimisu Inn, Ayabe. This discussion reminds our generation that we should be more open and connected to each other, though we may be differ in colors, race, culture, religion, belief, nationality, and necessities. Hereby we arrive in a destination where we should act locally and connect globally. This should not be a big trouble for this creative generation, since people starts unlimited co-working, technology supplies unlimited communication, and nature still provides its good. Although the urban area will never stop grow vastly, rural area should also keep up. This seems impossible as the nature of the two places holds major differences. Yet today, fortunately some people starts to see and act upon this imbalance of nature. Slowly but surely.

Though diversity might separate us before,
but unity is now our common reason,
as sustainability is the future for us all.

As this is the last International Conference of Design for Sustainability, may this report bestow a simple insight for the future generation. Tomorrow, next year, or 20 years from today, there may be some youth trying to understand sustainability and find this report somewhere in the World Wide Web from their advanced gadget. If that time truly arrives, I do hope this report will contribute as a humble answer for them. This may be just a small report that can never answer the differ issues upon sustainability coming from this colorful earth, but I believe it holds hope for our big future. May sustainability continuously be remembered, be shared, and be the common between us. **Sustainability is a matter of keeping the balance of the diversity**, in between the old and the new, the urban and the rural, the elderly and the youth, the natural and the industrialized, the money and the value, the offline and the online. For being fast does not always mean better, being slow does not always mean worse too. The earth needs us as much as we need it. "We do not inherit the earth from our ancestors, but we borrow it from our children", thus let us prepare and welcome the upcoming with humble acts to each other, especially to this earth. **As sustaining our life means nothing without sustaining the nature of life itself.**

All English parts of this report were written by Lavinia Elysia.





■ 本会議報告書、及び過去に開催した会議の報告書は、下記ホームページにて公開しています。

www.sustainabledesign.jp

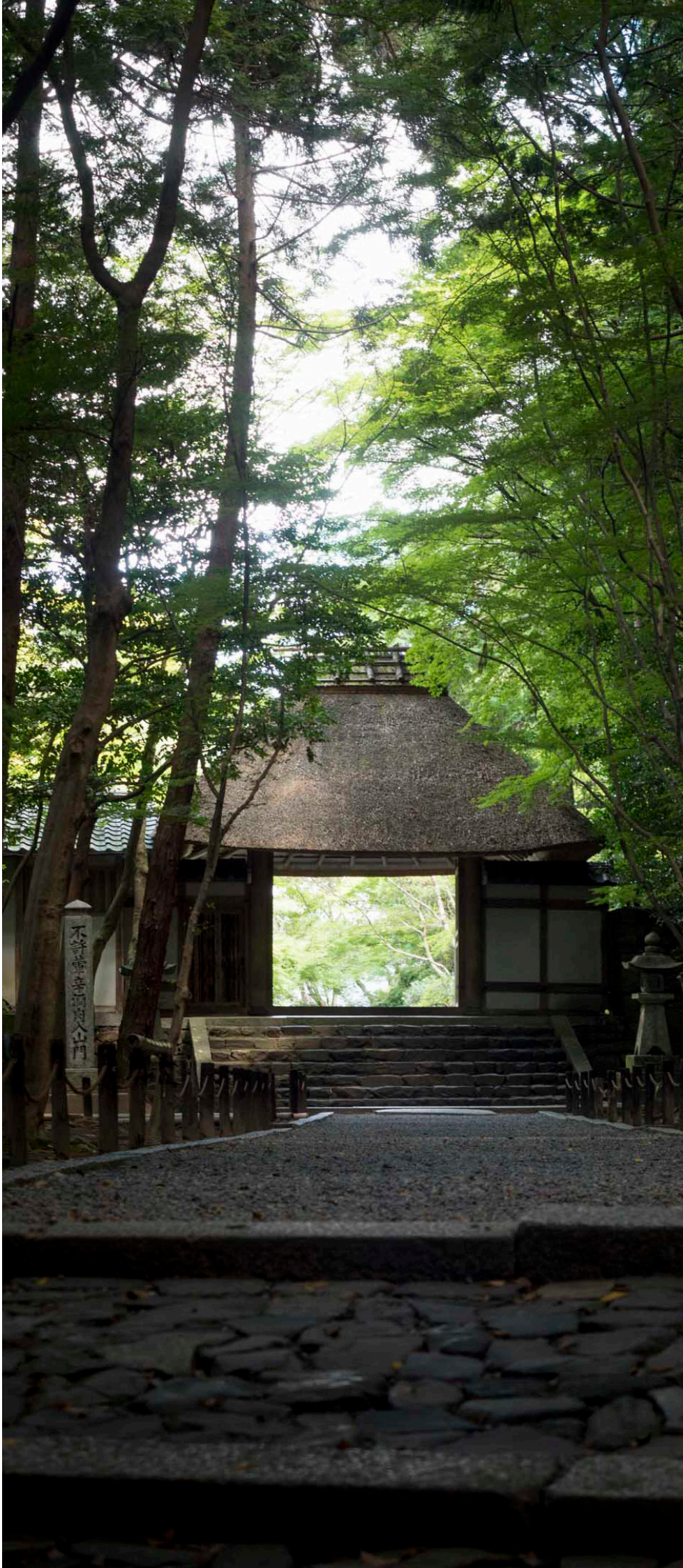
■ For English Information, please see our web site.

www.sustainabledesign.jp/e/

第 11 回サステナブルデザイン国際会議
Destination 2016
with tennenn design 2016
報告書

2017 年　発行

発行：　サステナブルデザイン国際会議実行委員会
編著：　サステナブルデザイン国際会議事務局
執筆協力：　Lavinia Elysia
写真：　貝塚 純一

問合先：　サステナブルデザイン国際会議事務局
（株式会社オープンハウス内）
〒757-0212 山口県宇部市今富 25-1
Tel:050-3805-1485　Fax:050-3730-6070
mail@openhouse.co.jp
www.sustainabledesign.jp

©2017 The International Conference of Design for Sustainability